

けになってしまいます。

能力を磨くこと以上に必要なのは、自分でできないことを誰かにお願いできる関係を築くこと、そして、周囲の人がそれを受け入れて補うことではないでしょうか。

子どもの生きづらさに気づかない大人

星美学園短期大学幼児保育学科准教授であり、特別支援学校での外部講師としての勤務経験も豊富な遠藤愛氏は、学生時代の研究で行った特別支援学級への放課後支援活動において境界知能の生徒たちの存在を知った。

「東京都青梅市にある特別支援学級の中の自閉症・情緒障害学級を訪れた、一七年前のことです。その当時、そこには発達障害の子が多く集まっていました。その中に、一定数、いわゆる境界知能の子がいるこ

とを知りました。当時は境界知能という言葉も一般的ではなくて、「知的に境界領域にいる」という認識だったと思います」（遠藤氏）

その後、臨床心理士として境界知能の生徒を支援してきた立場から、遠藤氏はこう話す。

「学力でいえば、小学生の頃から習得に時間を要し、中学生くらいになると一般学級についていくのはかなり厳しくなるケースが多いと感じます。日々宿題やその管理に追われ、対人関係に恵まれないと本人も学校が楽しいと思えなくなり、結果として不登校、非行に繋がる場合もままあります。

学校や大人にとって問題行動を示さない境界知能の生徒は、ある意味でさらに悲惨です。本人の「困り感」が気付かれず、放置されてしまうことさえあります。学校業務は年々多忙化しており、学校にとって

ねることもあります。

本来であれば、「その子どもにとって最も有意義な教育が何なのか？」という長期的視点に基づいて判定されるべき問題です。しかし現実には、当人を蚊帳の外において、複雑な因子が絡み合って議論されていることもあるのです」（同氏）

あくまで当事者の「生きづらさ」に傾聴すること。この点に遠藤氏がこだわるのには、理由がある。代々続く剣士の家系に生まれた氏は、実家が営む剣道道場で多くの大人たちに囲まれながら育った。

「私自身も、人間関係に悩んで不登校になった経験があります。皆が当たり前前にできている登校さえできずにふさぎ込んだ時、助けてくれたのは周りの大人でした。勿論、専門家のケアが必要な場面もありますが、身構えずに自分が困っていることに耳を傾けてくれる人の存在は殊更に

困る問題から着手する傾向にあるからです」

「生きづらさ」を抱える生徒が放置される理由は他にもある。

「私は現在、ある自治体の就学支援委員会の委員をしています。委員の役割の一つに、教育委員会が準備する就学予定者の判定資料をもとに、その生徒の望ましい進学先（特別支援学校、一般の学校の特別支援学級、一般学級）を保護者に通知することがあります。

最も慎重に判断する必要があるのは、IQ七〇〜八〇くらいの、境界知能の生徒です。その生徒たちには知的障害者手帳の交付が認められないケースがほとんどなので、多くの専門委員は「通常学級での教育が望ましい」という判定をします。しかし、深刻な問題行動を示している生徒や本人の「困り感」が強い生徒には、一次的に特別支援学級の利用を

大切だと私は感じます。

例えば、学生時代に研究調査で訪れた特別支援学級の子どもたちは、自分の「困りごと」を言語化するのが上手でした。その学級では担任の先生が日々子どもたちとの対話を大事にし、彼らの話を傾聴してくれたからだと思います。できないことに落ち込むのではなく、それを相手に開示して対話することで克服していく。そんな強かさもあるのだと思います」（同氏）

世間は、「わかりやすい障害」を抱えた人を丁寧に扱うようになつたが、「生きづらさ」の奈落にいる人々を覗き込み、手を差し伸べずに嘔う。健全と障害のあいだ。濃でもなく淡でもない、狭間にこそ社会の理不尽さが滲みだす。真に成熟した社会が到来するまで、「わかりにくい障害」を抱えた人々の傷が癒えることはない。

境界知能の生きづらさ

- 勉強についていけなかったり、ミスが多くて仕事ができなかったりする
- 「努力しない」「やる気がない」とみなされて、人間関係がうまくいかないことがある
- 見た目は健常者と変わらないため、困難が気づかれにくく、支援も得にくい